

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370341

研究課題名(和文)近代フランス文学における散文の研究

研究課題名(英文)Study on Prose in French Modern Literature

研究代表者

塚本 昌則 (Tsukamoto, Masanori)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：90242081

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：フランスの近代文学、とりわけ1850年代以降の文学において、散文はある特別な言語形態とみなされるようになった。詩的強度をそなえるようになった散文は、小説、自伝、抒情詩、戯曲、批評等、ロマン主義以降、主要な文学ジャンルとなった形式そのものを破壊し、二十世紀にはいずれの形式にも区分できない作品が数多く書かれるようになった。どうしてこのような変化が起こったのか。本研究では、この疑問に「語り声」という視点から分析を行った。テクノロジーの進展による知覚の変化と、言葉が古代からもってきた歌の力の緊張関係が、散文が近代もつようになった詩的強度の源泉のひとつとなった、というのが本研究で得た知見である。

研究成果の概要(英文)：In modern letters, particularly literature from the 1850's, literary prose started being seen as a particular mode of language, having a poetic intensity. During the 20th century, prose considered as a kind of poetry tends to destroy the literary genres that had become predominant after romanticism such as novel, autobiography, lyric or critical poetry, and makes it possible for writers to create many uncategorized works. Why did this change occur? We tried to answer this question from the point of view of "the narrative voice". Our observation is the following one: the tensions between the change which has occurred in perception because of the development of various technologies concerning the voice, and the power of the immanent song in language since antiquity, became the sources of the poetic intensity which prose was to embed in modernity.

研究分野：フランス文学

キーワード：散文 フランス近代文学 声 音響技術 非人間

1. 研究開始当初の背景

散文は、手紙、日記、書類など日常でも使われる雑多な形式であり、韻文と異なってそれ自体を芸術の形式とみなすことはむずかしい。ところが、フランスの近代文学、とりわけ 1850 年代以降の文学において、作家の書く散文は通常言語とは異なる特殊な言語形態であるという考えが広がりはじめた。散文による作品が、型ではなく強度としてのポエジーを体現する形式として意識されるようになったのである。詩的強度をそなえた散文は、小説、自伝、抒情詩、戯曲、批評等、ロマン主義以降、主要な文学ジャンルとなった形式そのものを破壊し、二十世紀にはいずれの形式にも区分できない作品が数多く書かれるようになった。散文において、日常言語と芸術的言語、もしくは文学的言語を区別するこの考え方はどこから来たのだろうか。また、文学的言語としての散文は、どのような特性をもつものと考えられたのだろうか。

この疑問をめぐって、19 世紀前半、ロマン主義において「散文」が得た特別な地位については、優れた研究が存在する（ルカーチ『小説の理論』（1920 年）、ベンヤミン『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』（1920 年）など）。また 1920 年代以降、モダニズムにおけるさまざまな言語実験については、数え切れないほどの専門研究がなされている。こうした研究状況にあって、ジル・フィリップとジュリアン・ピアが中心となり、1850～2000 年という年代の区切りで、その間に形成された「文学言語」としての散文を分析するという、画期的な共同研究が行われた（*La langue littéraire : Une histoire de la prose en France de Gustave Flaubert à Claude Simon*, sous la direction de Gilles Philippe et Julien Piat, Fayard, 2009）。この研究は、散文を文法という機能から捉え直そうとした点で「散文」研究を刷新した。ジル・フィリップたちは、ペリオド文 *période* と呼ばれる、フランス文学伝統の複雑な文形にとどまらない、文法的、統辞論的に把握し直された散文形式が、どのようにして文学言語として認められるようになったかを、文学研究の新たな課題として浮かびあがらせた。この時代の作家たちが追求したものを、流派や個別性を超え、文の作り方という視点から分析する姿勢を打ちだし、散文の特性を明らかにしようとする問題意識は、新たな研究領域を切り開く重要な視点の提示だった。

しかし、フランス語の文法や統辞という視点から分析しているために、フランス語を母国語としない人間にとっては、提起された問題に対して、かならずしも納得のいく回答が得られたわけではない。文の形態分析を通してさまざまな成果がもたらされていることは確かであり、そこから学ぶべき点も数多くあるが、近代における散文の

地位の変化という問題は、別のアプローチによってさらに展開されるべき内容をはらんでいる。「美しい本は一種の外国語で書かれている」とブルーストは言ったが、通常言語とは異なるこの「外国語」としての文学言語が、とりわけ韻文という独自の形式を備えた形態においてではなく、散文というごく日常的な言葉形態によって生みだされるとき、そこでは何が起きているのだろうか。

本研究では、この問いに当初は、フィクション論の再構築という視点から取り組もうと試みた。最終的に、フィクション論というアプローチそのものが広大な領域を形成しているため、「語りの声」という問題に絞って研究を進めることにした。19 世紀半ばから 20 世紀後半にいたる広大な研究領域を、この視点から捉えなおすと、散文が新たな強度を獲得したこの時代の文学のどのような特性が見えてくるのだろうか。

2. 研究の目的

散文が詩的強度をもつようになった背景のひとつに、テクノロジーの進展による知覚の変化がある。知覚の変化を取り込もうと力と、言葉が古代からもってきた歌の力の緊張関係が、散文が近代もつようになった詩的強度の源泉のひとつとなった、というのがわれわれの作業仮説である。映像（写真、映画、テレビ、漫画）、移動手段（車、列車、飛行機）と並んで、声をめぐるテクノロジー（電話、無線、ラジオ、オーディオ）の発展は、言葉によって表象される世界に根本的な変化をもたらした。19 世紀以降、小説、自伝、抒情詩、戯曲、批評がそれ以前に優勢だった諸ジャンルを押しつけて文学の中心的ジャンルとなってゆくが、19 世紀半ばからの散文形式の発展によって、その序列もまた変わってゆく。現代では小説、自伝、批評等の枠組み以上に、散文のもつ文学的造形力のほうが優勢になっている。あらゆるジャンルの越境を可能とする散文という形式の可能性を検討しなくてはならない。なぜ散文がひとつの芸術としてポエジーを体現できるのか、という疑問への考察を深めることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

研究の方法はテキスト講読である。目の前のテキストをどのように読み、何に接続するか次第で、この方法に無限の発見可能性があることを今回も再認識した。研究課題をめぐって文献調査を進め、共同討議を重ねるうちに、文学における語りの問題、とりわけ語りにおける声の問題について再考することが重要であることがわかってきた。この点に関する認識を深めるため、研究分担者だけでなく、より広く共同研究の可能性を模索し、さまざまな研究者に呼びかけた。

具体的には、2014年4月、パリ第十大学のウィリアム・マルクス教授、2015年4月にはCNRS ジャックリーヌ・シェニュー＝ジャンドロン名誉主任研究員との共同研究を開催、さらに早稲田大学の鈴木雅雄教授に協力を依頼し、「声と文学」と題するシンポジウムを2回開催した(第1回目:9月27日、東京大学文学部、発表者6名;第2回目:12月13日、早稲田大学文学部、発表者9名)。

4. 研究成果

以上の研究を通して明らかになったことは、散文が詩的強度をもつようになった背景に、テクノロジーの進展による知覚の変化があったということである。知覚の変化を取り込もうと力と、言葉が古代からもってきた歌の力の緊張関係が、散文が近代もつようになった詩的強度の源泉のひとつとなった。このことは、映像(写真、映画、テレビ、漫画)、移動手段(車、列車、飛行機)と並んで、声をめぐるテクノロジー(電話、無線、ラジオ、オーディオ)の進展が、言葉によって表象される世界にどのような変化をもたらしたかを詳しく検討することで明らかになる。さまざまなテクノロジーによる知覚の変化によって表象世界に起こった変化と、言葉が古代からもちつづけている歌の声とは、現代においても緊張関係をたもちながら創造力を発揮している。この視点からの近代における散文に関する考察を、今秋『声と文学』(仮題、平凡社)出版する予定である。

声というテーマに関する研究は数多く存在するが、フランス近代文学において生じた散文の位置づけの変化と関連づけながら声を分析した研究は、おそらくこれまでに国内には存在しなかった。現在飛躍的な発展を遂げつつある音響技術の歴史の成果を取りいれながら、近代文学研究を、音響の録音・再生技術と歌のもつ力との緊張関係において捉える今回の研究成果を、今後は海外にむけても発信していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計17件)

塚本昌則、「ヴァレリーとフロイト-奇妙なまなざしをめぐって-」、『思想』、2013年4月号、p.243-261(査読無)

塚本昌則、「さすらいの詩学-マルグリット・デュラス監督『トラック』を中心に」、『文学と映画のあいだ』野崎勲編、東京大学出版会、2013.6、p.61-82(査読無)

塚本昌則、「「夢の圧力」-プルーストとヴァレリーにおける眠りと夢について-」、『思想』、2013年11月号、p.103-123

(査読無)

Masanori TSUKAMOTO, « La conscience comme événement — une relecture de *L'Ange* », *Forschungen zu Paul Valéry*, n° 24, 2011(2013.12), p.53-70(査読無)

野崎勲、「文学部と人文知の挑戦」『UP』第43巻第10号、通巻504号、2014.10、p.1-4(査読無)

Yoshikazu NAKAJI, « La poétique de la charité et ses limites », *Lire le « Spleen de Paris » de Baudelaire*, André Guyaux et Henri Seppi (dir.), Presse de l'Université de Paris-Sorbonne, 2014, p.113-124(査読無)

Yoshikazu NAKAJI, « La poétique d'une langue l'autre : recherche, traduction, reinvention », *Nichifutu Bunka*, revue de collaboration culturelle franco-japonaise, n° 84, 2014, p.221-227(査読無)

塚本昌則、「ヴァレリーと石川淳 - 精神をめぐって」、『日仏翻訳交流の過去と未来 - 来るべき文芸共和国に向けて』西永良成・三浦信孝・坂井セシル編、大修館書店、2014.11、p.73-90(査読無)

塚本昌則、「まどろみの詩学 - プルーストとヴァレリーにおける夢」、『言語文化』第32号:「特集プルーストと二十世紀文学」、明治学院大学言語文化研究所、2015.3.31、p.59-77(査読無)

野崎勲、「大いなる遺産-プルーストと現代フランス小説」、『言語文化』第32号:「特集プルーストと二十世紀文学」、明治学院大学言語文化研究所、2015.3.31、p.181-198(査読無)

野崎勲、「悲劇の啓示-フォークナーと第二次大戦後のフランス」、『フォークナー』第17号、松柏社、2015.4、p.4-12(査読無)

塚本昌則、「ヴァレリーと写真」、『詩とイメージ-マラルメ以降のテキストとイメージ』マリアンヌ・シモン=及川編、水声社、2015.6、p.213-226(査読無)

塚本昌則、「オートフィクションと写真-本物とは異なる価値観形成に向けて-」、『生表象の近代 - 自伝・フィクション・学知』森本淳生編、水声社、2015.10、p.409-426(査読無)

野崎勲、「作者と訳者の境界で-ロラン・バルトから森鷗外へ-」、『日本近代文学会関西支部編』『作家/作者とは何か テクス

ト・教室・サブカルチャー』和泉書院、2015.11.10、p.113 - 128 (査読無)

Yoshikazu NAKAJI, « La poétique de la charité et ses limites », *Lire « Le Spleen de Paris » de Baudelaire*, André Guyaux et Henri Scepti (dir.), Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2014, p.113-124 (査読無)

Yoshikazu NAKAJI, « La poésie d'une langue à l'autre : recherche, traduction, réinvention », *Nichifutu Bunka*, revue de collaboration culturelle franco-japonaise, n°84 (Numéro spécial 30^e anniversaire du Prix Shibusawa-Claudel), Maison franco-japonaise, mars 2015, p.221-227 (査読無)

Yoshikazu NAKAJI, « Rimbaud autocritique », *Rimbaud poéticien*, sous la direction d'Olivier Bivord, Classiques Garnier, 2015, p.91-99(査読無) ISBN 978-2-8124-4753-2 EAN 9782812447532

[学会発表](計17件)

塚本昌則、「ヴァレリーにおける「フィギュール」概念」、ワークショップ「来るべき修辞学 - 文学と哲学のあいだで - 」での発表、日本フランス語フランス文学会2013年度春季大会、2013.6.2、国際基督教大学(東京都・三鷹市)

塚本昌則、「オートフィクションと写真 - ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』を出発点に」、一橋大学主催シンポジウム「生表象の近代-自伝・フィクション・学知」での発表、2014.2.2、一橋大学(東京都・国立市)

中地義和、「言語を移り住む詩-研究、翻訳、再創造」(渋沢クロード賞30周年記念シンポジウム「フランス的知性の今?」)、2014.4.3、日仏会館(東京都・渋谷区)

塚本昌則、「精神について-ヴァレリーの翻訳を中心に」、日仏シンポジウム「日仏翻訳交流の過去・現在・未来」(Traductions France / Japon— histoire, actualité, perspectives)、2014.4.20、日仏会館(東京都・渋谷区)

塚本昌則、「プルーストの夢、ヴァレリーの夢」、明治学院大学主催のシンポジウム「プルーストと20世紀」での発表、2014.5.10、明治学院大学(東京都・港区)

Kan NOZAKI, Table ronde : « Un auteur et ses traducteurs », Jean-Philippe Toussaint,

Marianne Kaz, John Lambert, Kan Nozaki, l'Hôtel de Massa、主催：フランス文芸家協会(Société des Gens de lettres)、2014..6.3、パリ(フランス)

Kan NOZAKI, « Au-delà de l'orientalisme : Nerval à la lumière de Said », Colloque international : « Nerval : histoire et politique », les jeudi 5 juin, vendredi 6 juin et samedi 7 juin 2014, aux Archives Nationales、主催：Université Paris-Est, 2014.6.5、パリ(フランス)

Yoshikazu NAKAJI, « La poésie d'une langue à l'autre : recherche, traduction, réinvention », 日仏シンポジウム「L'avenir des échanges franco-japonais en sciences humaines et sociales」人文社会系諸学における日仏交流の未来、日本文化会館、2014.6.7、パリ(フランス)

塚本昌則、「声、夢、プンクトゥム-ヴァレリーの「内的対話」を通して」、東京大学文学部仏文研究室主催のシンポジウム「声と文学 - インデックスとイリュージョン：それは誰の声か」での発表、2014.9.27、東京大学(東京都・文京区)

野崎勲、「歌声と回想-ルソー、シャトーブリアン、ネルヴァル」、シンポジウム「声と文学」、東京大学文学部仏文研究室主催のシンポジウム「声と文学 - インデックスとイリュージョン：それは誰の声か」での発表、2014.9.27、東京大学(東京都・文京区)

中地義和、「フランス文学研究・翻訳の現在」、日本フランス語フランス文学会秋季大会におけるラウンド・テーブル、2014.10.24、広島大学(広島県・東広島市)

Yoshikazu NAKAJI, Commentaire développé sur la conférence de Laurent Jenny, « La photo contre l'image », Maison franco-japonaise, 2014.11.7、日仏会館(東京都・渋谷区)

Yoshikazu NAKAJI, « La poétique de la charité et ses limites », 国際コロッセク「Journées d'étude sur *Le Spleen de Paris* de Baudelaire」(5 et 6 décembre 2014)、パリ第四(ソルボンヌ)大学、2014.12.6、パリ(フランス)

Masanori TSUKAMOTO, « Valéry et le quotidien - une poétique de l'interruption », リヨン高等師範学校主催の研究集会「Arts et quotidienneté en France et au Japon : approches du contemporain」における発表、2015.9.25、リヨン(フランス)

Masanori TSUKAMOTO, « Barthes et la violence du Neutre », 青山学院大学主催の国際研究集会 « Roland Barthes, l'écriture et la vie »での発表、2015.11.9、青山学院大学(東京都・渋谷区)

Masanori TSUKAMOTO, « Variation sur un paradoxe de Valéry : les éditions japonaises de « Teste » et de « Léonard » ». Fondation Singer-Polignac (Université Paris-Sorbonne, Université Paris Ouest, Item 共同開催)での国際研究集会« Paul Valéry, 70 ans après » (2015.11.26-27)での発表、2015.11.27、パリ(フランス)

塚本昌則、「三島由紀夫と非人間の詩学」、青山学院大学主催の国際研究集会《日常とは何か、西欧の場合、日本の場合》« Approches du quotidien au Japon et en occident » (2015.12.5-6)での発表、2015.12.6、青山学院大学(東京都・渋谷区)

[図書](計7件)

塚本昌則(編著)『写真と文学 - 何がイメージの価値を決めるのか』、平凡社、2013.10、377p.

野崎 歆(編著)『文学と映画のあいだ』野崎 歆編、東京大学出版会、2013.6、228p.

野崎 歆、『翻訳教育』河出書房新社、2014.1.30、219p.

野崎 歆、『映画、希望のイメージ-香港とフランスの挑戦』Fukuoka Uブックレット、弦書房、2014.2.15、65p.

野崎 歆、『シリーズ人文知 2 死者との対話』(共編著)、東京大学出版会、2014.11.28、227p.

野崎 歆、『谷崎潤一郎と異国の言語』中公文庫、2015.4、248p.

野崎 歆、『アンドレ・バザン 映画を信じた男』春風社、2015.6、227p.

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塚本 昌則 (Tsukamoto Masanori)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90242081

(2) 研究分担者

月村 辰雄 (Tsukimura Tatsuo)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50143342

中地 義和 (Nakaji Yoshikazu)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50188942

野崎 歆 (Nozaki Kan)
東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：60218310

新田 昌英 (Nitta Masahide)
東京大学大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：70634559

(3) 連携研究者

なし